

豊丘村 ● 2006年・合併50周年記念 村勢要覧

Mile Stone

変わり行くむら、変わらない心。

道程標
みちしるべ

豊
TOYOOKA OUTLOOK
丘

C O N T E N T S

4	心、つないで 武田長年さん／林はつみさん	
	想い、重ねて 毛涯章平さん／筒井恵子さん	6
8	大地を見つめて 仲平 淳司さん／筒井 寛さん／片桐彦利さん	
	手わざに宿る 早川繁一さん／吉川要一さん／池田かやさん	10
12	農に生きる 久保田一弘・隆弘さん／原 豊さん／春日俊文・健司さん	
	豊かなる丘に暮らす 井上時満さん／小林睦夫さん／小林功治さん／中原 淳さん	14
16	未来への種 筒井芳夫さん／森田恵子さん／三石茂昭さん	
	夢、響かせて 酒井浩文さん／このゆびとまれ／原 道弘・和弘・良太さん／楯 利彦さん	18
20	躍動するふるさと 天恵製菓株式会社／長野酒井医療株式会社／株式会社タカモリ／豊丘ショッピングセンター協業組合「バルム」	

Mile Stone 道程標

豊丘村 ● 2006年・合併50周年記念 村勢要覧

変わり行く心、変わらない心。

2つの村が合併し豊丘村が誕生したのは、昭和30年4月1日。それから、50年の歳月が流れました。この村に生まれ、村と共に歩んできた方、自然を愛し、地道な活動が続けてきた方、志を抱いて新しい故郷に選んだ方、未来への種を蒔いている方、そして豊丘を拠点に各界へ挑む企業。この村勢要覧には、豊丘に暮らし、村を想う心がたくさんつまっています。心ふれあいしあわせ実感、うるおいの郷へ。熱いメッセージが、未来への道程標マイルストーンとなることを希います。



きれいな旅館や割烹がいいばかりじゃない。
地元の松茸を、堀越で区民のもてなしと一緒に食べていただくから美味しいのです。



堀越区民会館は、昭和42年に本校に統合されるまで、豊丘北小学校堀越分校があった場所。明治23年にこの場所に開校して以来、千人以上が通った。

心づなないで。



「ある時、お客さんに『この松茸本当に地元産かい、輸入物なんじゃないの?』とからかわれたことがあってね、その日の伝票を一枚ずつ見せて説明したことがあったなあ。結局、疑って悪かったと謝ってくれたけれどね。地元産でなかったら、堀越の松茸観光じゃなくなってしまうから」と武田さん。堀越の区民会館で松茸観光がはじまったのは、昭和48年のこと。以来30余年の歳月を経て、豊丘を代表する観光のひとつになった。毎年、区の観光委員が計画を立て、区民が協力するかたちで運営を行っている。

「年によって違いはあるけれど、だいたいシーズン6千人くらい来てくださっています。多い時は、2ヶ月で4千人入ったこともありましたね。せつかく来てくださるのだから、もてなしを行動で表そうと発案されたのが、ステージでの踊り。きれいな旅館や割烹がいいばかりじゃない、地元で穫れた新鮮な松茸と堀越区民の精一杯のもてなしの心があれば、それは立派なブランドだ、皆で知恵と力を出し合って続けてきました。キャンペーンに名古屋まで出向いて、駅前でパンフレットを配ったこともありましたね」

松茸観光の期間は、ちょうど果樹の収穫や農作業の多い時期。区民といえども貴重な時間を割いて集まってもらうのに、ボランティアではない。それなりの日当を支払わなければ...と、事業としての運営を大切にできた武田さんは話す。とはいえ、観光を始めた当初に比べ、堀越区全体で30戸近く住居数が減り、松くい虫の影響などで収穫高は減少傾向にある。他の茸と違って人工栽培できない松茸は、豊富な山林資源あつてこそ。

「堀越の松茸は香りが違う、と何度も足を運んでくださるお客さんはわかってきています。その気持ちを大切にしたいし、堀越の素朴な雰囲気も大切な味わいなのだと誇りを持ってほしいですね。苦しいかもしれないけれど、探せば可能性はどこかにあると思うのです」と、干し梅生産における先進農家として、平成13年、県の『きらりと光る農業農村活動賞』の表彰を受けた武田さんらしい挑戦者の顔のぞいた。

林はつみさん(西部)

毎朝、桜を見上げて手を合わせています。
この樹は、自分にとって精神的な御守りでもあるんです。

笹見平のしだれ桜は、平成15年に村の文化財に指定された名勝地のひとつ。4月半ばの花の頃には、県内外からの観光客がマイクロバスや自動車で訪れる。やわらかなドーム型の樹形に咲く桜花は、西部の里山にこそ似合う清楚な美しさに満ちている。

「笹見平というのは、林家の屋号。近年は、桜巡りのツアーや写真愛好家の方など大勢の皆さんが来てくださいますね。遠くは、札幌から見えた方もいました。あの花の下では誰も怒りの感情なんて持たないでしょう、満ち足りた幸せな気持ち

ちにくるんです」そう言つて、しだれ桜の所有者である林はつみさんは、幹をやさしくなでた。樹元には、林家の先祖が祀られている。

花の頃だけでなく、芽吹きや緑に覆われた夏、雪を載せた冬の姿もそれぞれに趣があつて好きだと語る林さん。「毎朝桜を見上げ、手を合わせています。私にとって、桜は心の御守り。不安な時やよくよくしそつな時、樹の元に来ると落ち着き

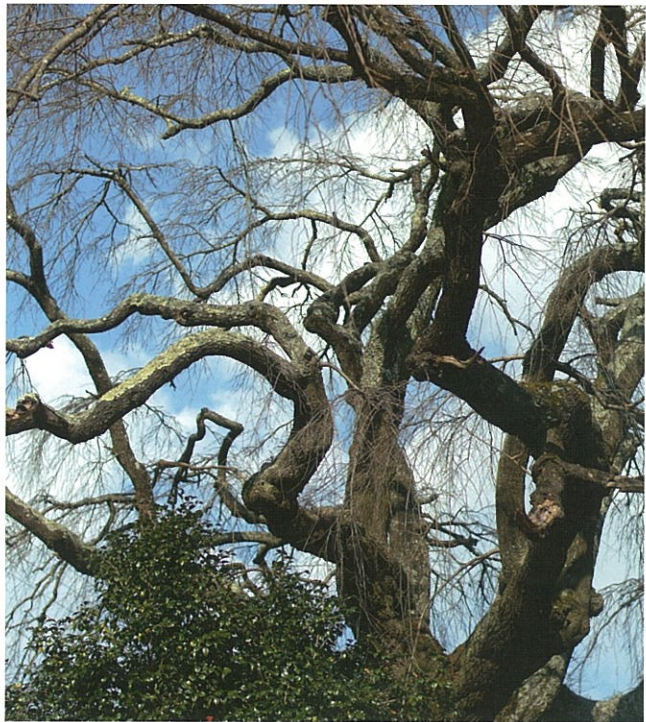
ます。私が、この樹を守っていきます、という決意と、どうか私を見守ってください、という祈り。両方の気持ちがあるんです」

「昨年に他界されたご主人とは、村の青年団で活動を共にし、結婚した。生活改善が叫ばれてい

た当時、披露宴は福祉センターで会費制により行われた。『私たちは福祉センターで結婚した第1号だったんですよ。会費は確か男性が8500円で女性8000円。記念品なしの質素なもの。青年団では、若い村民が皆で村のことを熱く語り合ったり、勉強したりしました」

林さんはまた、中学生や営農ボランティアの受け入れを続けているひとり。「忘れられないのは、ちょうど受け入れ中に、牛のお産があつたこと。6人の生徒がお産の瞬間に立ち会い、手伝ってくれました。それから、星空を見上げたことなどなかったという男の子が、こんなにきれいな星のある宇宙へ僕はいつか行きたい!と話してくれたこともありましたね」

今年もまた、林さんの想いが花開く。



樹齢400年にして、添え木なしの銘木。かつてはここに阿弥陀堂があった。

毛涯 章平さん(市沢)

「一番」は、ひとりしかなれない。
しかし「流」なら、
志あれば誰でもなれる。
真の厳しさとは、
叱ることではないのです。

“先生”という言葉が、本当に似合う方だ。教職40年、村の教育委員会をはじめとした教育行政に20年、県内外への講演はすでに千回を超えた。この間、考えてきたことはずつと貫いていると語る。「常に『流』たるをめざせ」との言葉は、生徒や先生方にも常々お話ししてきました。番二等賞はひとりしかなれないものです。しかし、流なら誰でもなれる。今や世の中は、立身出世主義に駆られて、先を争って一番の座を求めようとする風が吹いています。強い志さえあれば、誰だっていつになっても『流』になれるのです」

合併の年、毛涯先生は31歳で松本市の小学校に勤務していた。50年前の日記に、「こんなことが書かれていたと紹介してくださった。『今日二日、子どもたちを高め得たか。すくなくとも自己の最善を尽くして子どもたちに対してきたか』『眠る前にちよつと考えてみたい。』」と、日本中の大人たちが真剣に子どもたちの将来を考えないと、取り返しがつかなくなるのはないか。私はどうしても一日に一度、考えてみたい。今日二日、子どもたちを育て高めたか」毛涯先生自身が、昨日書いた日記のようであるという。そして、この気持ちに帰って次の50年への出発にしたいと語る。

「豊丘には、戦前から戦後にかけて、『青年学校』がありました。進学せずには家業に励んでいた人たちのための夜学です。毎晩の学習のあとに、『五省(ごせい)』という自省の言葉を朗読したと聞きます。この五省がすばらしい。『一、使命の自覚に悔なかりしか』『二、身心智能の涵養に不足なかりしか』『三、言語りて真実に欠くるなかりしか』『四、行動いて懸命に遺憾なかりしか』『五、神と親(祖先)とを敬愛して恥ずるなかりしか』と。この五省の精神を持った方々が、今日の村の礎を作ってきたのです。願わくば、この精神を村の教育文化の原点として、光を当てたいと考えています」

厳しさとは、叱ることではない。こそぞという時を見落とさず、ほめるときは、喜びを伝え、叱るときは、哀しみを伝えなければならないのです。穏やかな口調に、教育への情熱が今もこもる。

想い、重ねて。

筒井 恵子さん(中部)

幸せの種は、感謝の大地に咲く。
ヤッホーおばさんは、
まだまだ伝えたいことがいっぱいです。

北小学校の子どもたちは、筒井恵子さんのことを「ヤッホーおばさん」と親しみを込めて呼ぶ。自宅後ろの通学路を通う子どもたちには、夏は庭から、寒い時は窓越しにヤッホーと声をかけ、手を振りつけているからだ。最初はみんな照れくさそうにしているそうだが、そのうち小さく手を振ってくれるようになり、筒井さんの姿が見えないと通学路からヤッホーと可愛い声が聞こえてくることもあるという。

穫することが出来る。サンルームには、大きな土間をしつらえ、誰もが気軽に夢や悩みを語り合えるように…と願いを込めた。庭は『花菜の風』我が家は『夢交紡』と名付けた。

「食べることは、命の源。子へ孫へ、これからはここに受け入れる方々に農業や食の心を私なりに伝えたい。野菜や花と同じように、食べることに、ふれあうことで人間もつくられていくんです」

筒井さんは、昨年キッチンとサンルームをリフォームし、農家民宿の許可を取得した。広く開いた窓からは、折々の花や野菜を眺めたり収穫したり。

昨年北小学校2年生9名全員が、筒井さん宅で訪れ、出前の音楽会を開いた。ヤッホーおばさんへ歌とダンスを披露され、サンルームは、緑に抱かれたステーションになった。



中部共同炊事場完成記念写真より(筒井さん提供)昭和35年12月。農繁期の働き手を助けるために、ここで食事を作った。食生活こそが豊かな心と健康の礎…ひとりではできないことでも皆で力を合わせようとの強い願いが写真から伝わってくる。

仲平 淳司さん(北市場三)

地球は人間だけのものじゃない。
小さな生き物が一緒に生きているんです。
オオムラサキを通して、命や自然について
何かを感じてほしいと思っています。

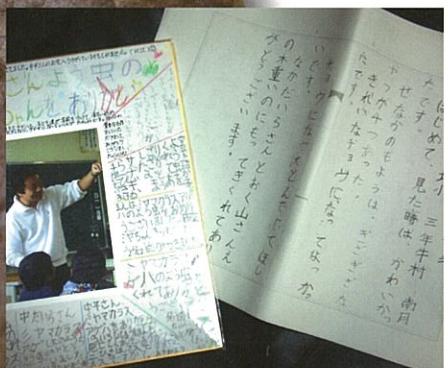
毎年5月、南・北小学校の3年生の授業教材として、国蝶 オオムラサキの幼虫を届けている仲平さん。「オオムラサキの幼虫は、えの木の鉢植えごと届けています。最初は幼虫を怖がっている子どもたちも、名前をつけ、興味深く観察をするうちに、愛着をもつて蝶を見つめてくれるようになります。生きた教科書として何かを感じるきっかけになればと思っています」

店舗の奥にある蝶の部屋には、オオムラサキだけでなく日本に生息する250種のうち200種を超える蝶の標本が並ぶ。標本箱の前に「蝶は自然の作った芸術。人間は、この色もかたちも作り出すことはできないんです。自分で蝶の飼育をしてみ、エサ、温度、湿度などすべてのバランスの難しさを実感しましたし、すべての蝶に適した環境を持つ地球の偉大さに改めて気づきました。人間なんて所詮非力な存在、地球は人間だけのものじゃない」と、私は蝶から教えられました」

中学生時代、校舎のまわりの雑木林にたくさんのミドリシジミが舞っていた光景を、今も思い出すという。季節の到来を道ばたの花や飛び交う蝶で感じることのできる心。私たちの周りには、蝶だけでなく小さな命がたくさん共存していることを知ること。仲平さんは、想いを込めて、今年も蝶を届ける。



100個の卵のうち、蝶になれるのは1割だけ。
えの木の葉の裏側で、小さな命がじっと春を待っていた。



筒井 寛さん(中部)

何気ないふるさとの風景の中に、
ハツとするような美しさが隠れています。
ポットホールも、そのひとつでした。

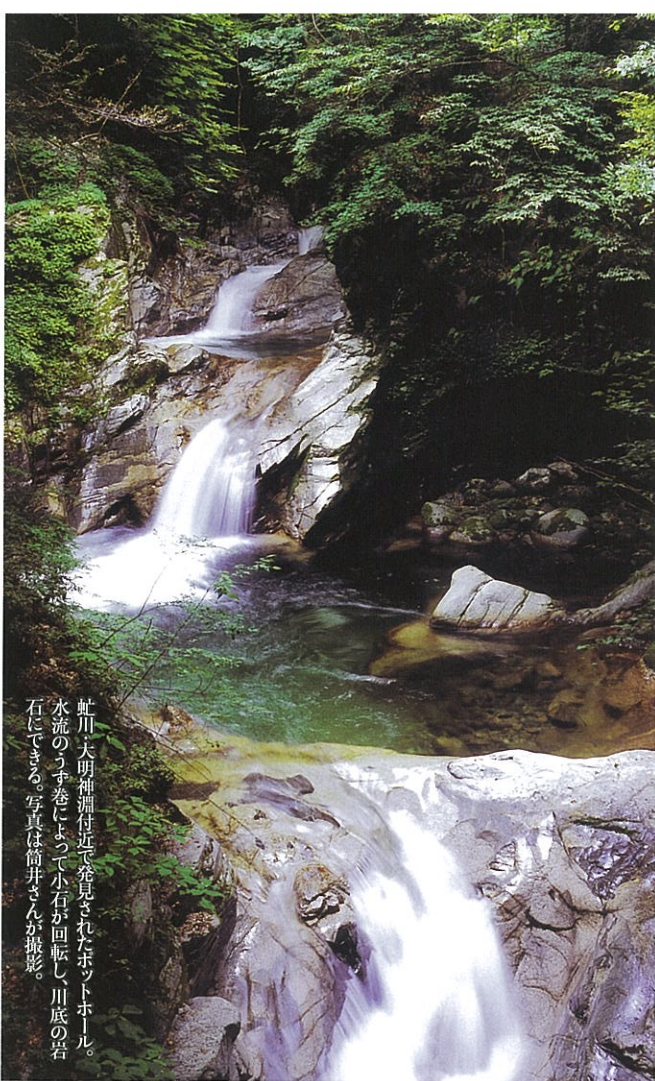
「直径約7メートル、深さは水面下1.5メートル、岩底から最上部までが約5メートル。日本最大規模のポットホールが豊丘に！」と報道されたのは、平成16年7月のこと。第二発見者の筒井さんも、ポットホールと共に数多くのマスコミに紹介された。

「旅行も時にはいいけれど、お金や時間をかけなくても身近な場所に感動する風景はいっぱい隠れているんだよね。ポットホールだってそのひとつ。自分は日本二だと思ってるよ」と笑った。

長年、床柱や床などの銘木を扱ってきた筒井さんが、本格的に写真をはじめたのは5年ほど前。ある時プロの写真家からアドバイスを受けた。

「信州は、どこを撮っても絵になる。だから地元を撮れ、ただ撮るのではなくて自分のテーマを持って、と。もともと山が好きだったから、四季を通じて滝の表情を追ってみよう、と思つてね。虹川の大明神淵付近は、『淵』の名前通りいくつもの滝があるんです。滝を撮影するために沢を登って見て発見しました。ポットホールだと目でわかりましたね」

風景だった、その季節、その瞬間のいちばんいい顔、表情をとらえたいと語る筒井さん。長い年月をかけて刻まれた国内最大級の発見は、あまりにも身近な村内に、静かに隠れていたのだと実感する。



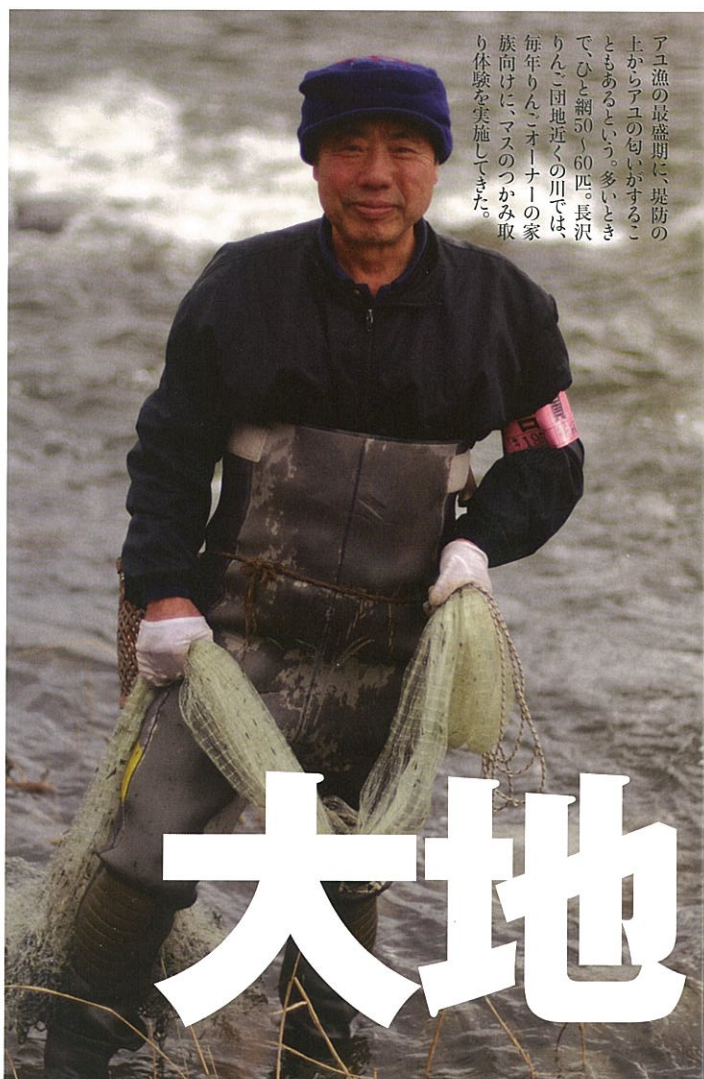
虹川・大明神淵付近で発見されたポットホール。水流のうす巻によって小石が回転し、川底の岩石にできる。写真は筒井さんが撮影。

片桐 彦利さん(北市場二)

毎日のように遊んでいた天竜川は、
水泳はもちろん、魚のつかみ取りから
先輩・後輩の人間関係まで教えてくれる
大きな学校でした。

下伊那漁業協同組合の神稲支部長を務める片桐さん。豊丘にはもう一つ河野支部がある。海のない信州では、川で捕れる魚が昔から貴重なタンパク源だった。下伊那漁業協同組合では昨年、イワナ2万匹、アマゴ28万匹のほか、アユやコイなどを放流したそうだ。

「昔は学校にプールなんかないから、子どもは川で泳ぎました。度胸試しと称して、明神橋の上から、深い所へ飛び込みをさせられたりして、恐かったですね。それでも、下には万に備えて上級生が待っていてくれたし、泳ぎは中学生が指導してくれましたから。危険な場所や、してはいけない



アユ漁の最盛期に、堤防の上からアユの匂いを感じることもあったという。多いときで、ひと網50〜60匹。長沢りんご園地近くの川では、毎年りんごオーナーの家族向けに、マスのつかみ取り体験を実施してきた。

大地を見つめて。



手ぬぎに宿る。

早川 繁一さん(下市場)

竹細工は、勘どころがすべて。竹のクセを見抜いて、生かす。一つとして同じものができないからいいんです。

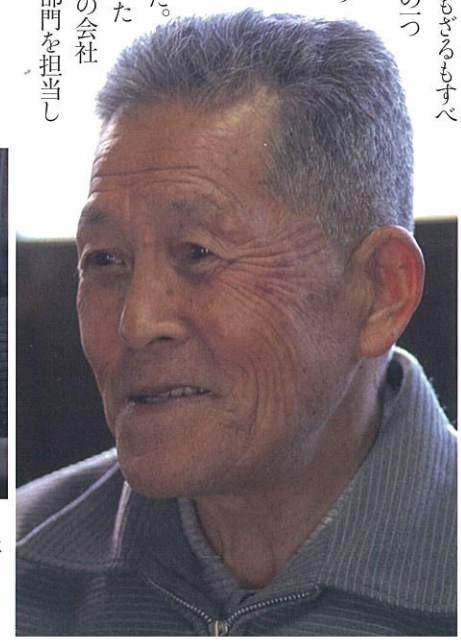
ホームセンターに並ぶプラスチック製品は、籠もどるもすべと同じ形、同じ顔。早川さんの作る竹製品は、その二つひとつに味があり、個性があり、温もりがある。

「竹細工業は私で3代目です。養蚕が盛んだった頃は、びくやか、ころじなどのいわゆる荒物といわれた農具がよく売れました。最盛期には飯田下伊那で300人、豊丘村内だけで8人の竹細工業者がいましたが、養蚕の衰退と手頃なプラスチックや段ボールの普及で、様子が変りました。佐久間ダムや秋葉タムの「じゃかご」づくりに行ったことも思い出します。その後、仲間と造園資材の会社を興し、退職するまで資材として竹に関連した部門を担当してきました」

早川さんが使うのは、村内の加工しやすい真竹が多い。素人は、細工の巧妙さに目が行きがちだが、一本ごと異なるクセを見抜き、切り、割り、剥ぐといった加工技術こそ竹細工の原点、と語る。

「勘どころは、竹に触れて覚えるしかない。竹には節もあるからね。なただって、こうやって使って覚えるしかない」と、手早く細く、薄く、竹を加工して見せてくださった。

垣根、獅子籠、料理店の舟形ライトなどの大物から、衝立や門松、干柿用に改良したかごじや腰びく、魚を捕るためのせせり(漁具)、花器に至るまで、退職後の近年も幅広い竹製品を手がけている。専門書を見ながら、「まだまだわからない編み方やつてみたい模様があるんです。花か、や新しい工芸品も作ってみたい。私は根っからの職人なんですよ」

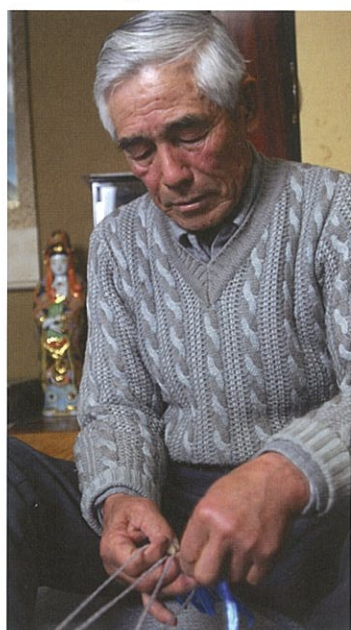


交流センターだいちが企画する伝統技術養成講座「竹細工体験講座」の講師を務める。豊丘の転機は、農地が流され、女性たちも復旧・復興作業に駆り出された36年だったのではないかと振り返る。



吉川 要一さん(小園)

指が擦れても手袋はしません。1メートル以上の大ぞうりから最小4ミリの豆ぞうりまで、想いを込めて作ります。



吉川さんは、わら細工だけでなく書号『玄徳』を持つ書道家、石工としての顔も持つ。手が入らないときは、竹串や針を使って編む。

「はじめてぞうりを作ったのは12歳の秋祭りだったかな。祖父が作るのを見て、自分で覚えてしまいました。ミミぞうりを作るようになったのは、10年ほど前から。見える？ ほら、真ん中に小さい点みたいミミぞうりがあるでしょ」と指をさす。よく目を凝らして見ると、額装されたミミぞうりの真ん中に、ひときわ小さな数ミリの豆ぞうりを発見。とにかく探求心旺盛で巧者な方だ。

会社勤めの傍ら、ぞうりやわらじの他、福縄やしめ縄などのわら細工を手がけてきた。わら細工に適したわらを作るため、稲は穂の出るお盆前に青刈りして干しておく。ぞうり作りは、まずわらを手早くほどき力加減で「なう」作業から始まる。吉川さんは縁起をかついだ左ない。上手になったものは、履いても縄目が荒れないという。両足の親指に縄をかけ、慣れた手つきで編み上げていく。わらの他に、ビニールテープを細く裂いたカラフルなぞうりも制作。ネックレスのように繋がった連作ぞうりが可愛らしい。

「食べ物と違って形が残るものだから、御利益があるように、と想いを込めて作ります。1メートル以上の大ぞうりから、最小4ミリの豆ぞうりまで、目の数は、ほとんど変わりません。ミミぞうりなら、30〜40分で二足。今までは2万足ほど作ったかな。わら細工は指が擦れて痛いけれど、手袋はしません。手の皮の感覚が頼りだからね」

できたばかりのわらじは、福島県の春日神社の春祭り用に依頼されたもの。その傍らには、海外の友人へのおみやげ用にと作られた、古布を編み込んだぞうりが並んでいた。



池田 かやさん(中部三)

有線で紹介してくれただから、また多くの方と交わりができました。気楽に、好きなものを楽しく作るというのが、ポリシーなんです。

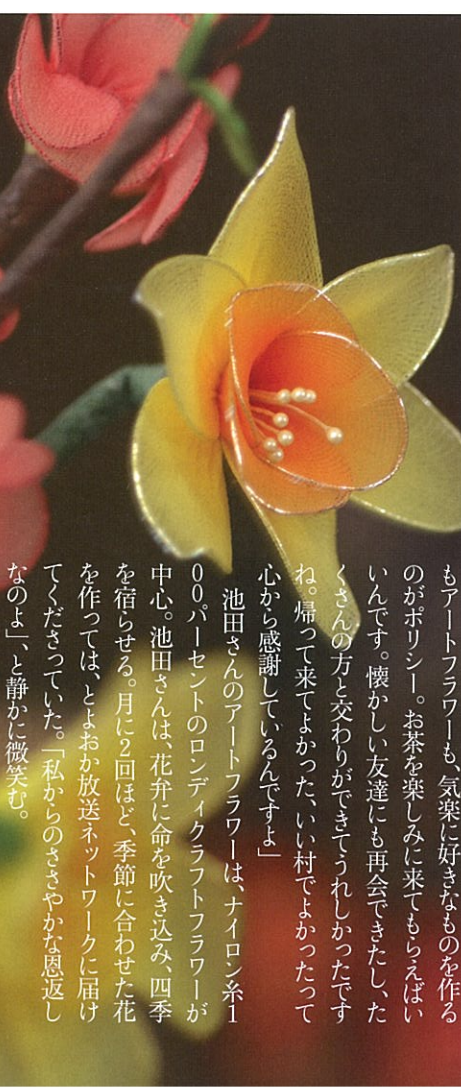


「根っから手仕事が好きなのね。いくらやっても疲れないの」と池田さん。着慣れた和服姿がよく似合う。

「今から20年ほど前、定年を機に久しぶりに帰って来たふるさとには、知らない方ばかり。寂しい気持ちを抑えながら、ずっと続けてきたアートフラワーで季節の花を作っては、デイサービスへ届けていました。そんな時ですね、有線からうちにも頂けないかと声がかかったのは…」

池田かやさんは、80歳を過ぎたとは思えない凛とした方。河野に生まれ、青年団で活動された時期を経て、主人の転勤で京都へ移住。京都時代は、仕事を続けながら「木目込人形」や「アートフラワー」を教えてこられた。主人と共に帰郷の後、有線池田さんの多彩なクラフトワークが紹介されたのをきっかけに、あちこちの集まりやサークルから教えてほしいと引っぱりだこになり、多いときで月に76人の生徒さんがいた、と話す。

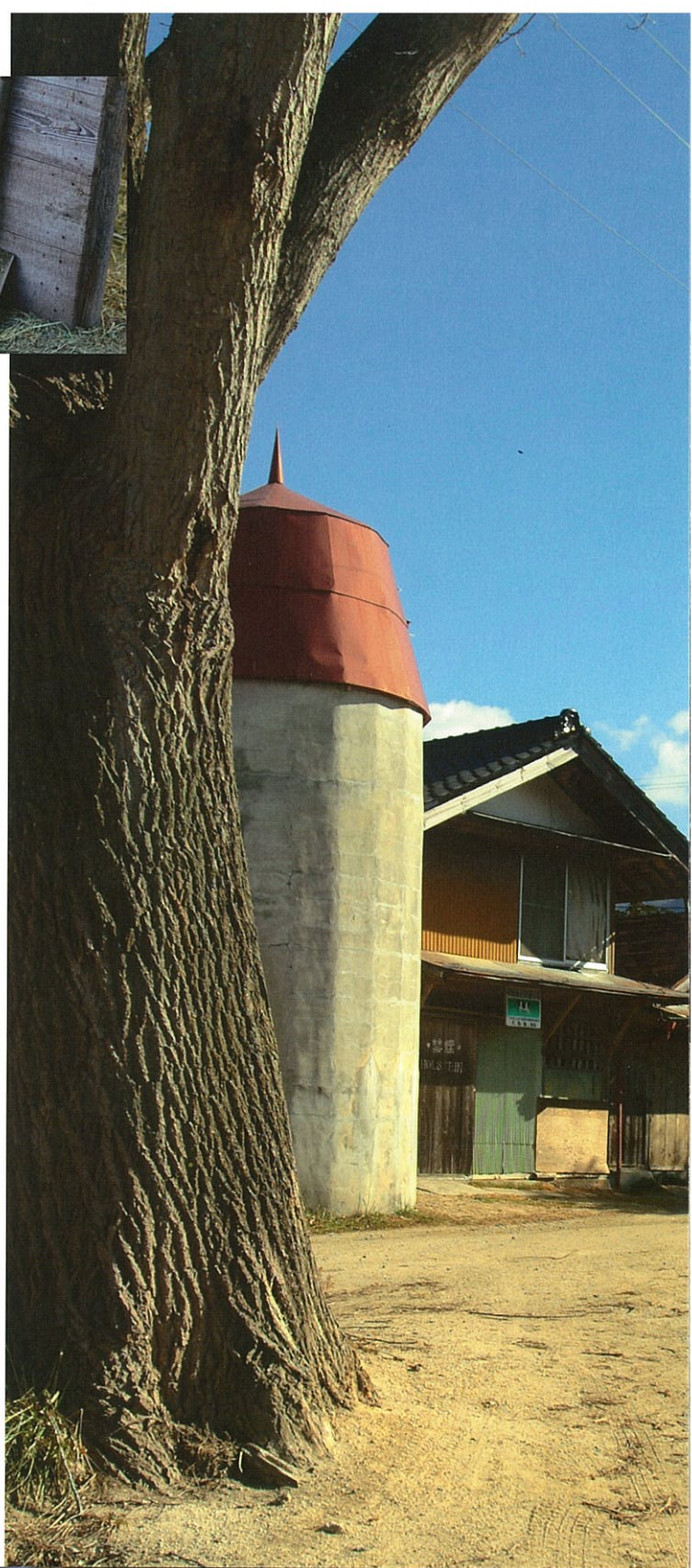
「私のお教室じゃなくて趣味の会。木目込もアートフラワーも、気楽に好きなものを作るのがポリシー。お茶を楽しみに来てもらえばいいんです。懐かしい友達にも再会できたし、たくさんの方と交わりができてうれしかったですね。帰って来てよかった、いい村でよかったって心から感謝しているんですよ」



池田さんのアートフラワーは、ナイロン糸100パーセントのロンディークラフトフラワーが中心。池田さんは、花卉に命を吹き込み、四季を宿らせる。月に2回ほど、季節に合わせた花を作っては、とよおか放送ネットワークに届けてくださった。「私からのささやかな恩返しなのよ」と、静かに微笑む。

手ぬぎに宿る。

農に生きる。



まっすぐに枝先を伸ばしたボプラ、赤いサイロ、谷を渡る風。牛舎の扉を開けると、牛たちがゆつくりとエサを食べている。堀越の先、まるで桃源郷のような菖蒲ヶ沢の地で、久保田さん親子は酪農を営む。「牛を飼いだしたのは、55年位前のことです。徐々に乳牛の頭数を増やしていき、15年ほど前に1年半かけて、種々の畜舎を自分で建設しました。今乳を搾れる成牛は40頭、生まれたばかりの仔牛から育成中の牛が20頭、全部で60頭飼育しています」と弘さん。

久保田家の1日は、毎朝午前6時前に畜舎で牛たちにエサを与えるところから始まる。その後掃除を済ませ、奥さんを加えた親子3人で搾乳。いくら機械化が進んだとはいえ、全頭の搾乳には1時間はかかるという。1日4度のエサと、朝晩2回の搾乳、牛たちの体調管理や畜舎の掃除などの細々とした雑務。それを365日休まず続けている。タンクに集められた乳は、主に中京圏の牛乳工場へと送られる。長男の隆弘さんは、高校卒業後、畜産試験場や農業大学校で酪農を学び、ふるさと豊丘に帰って後継者となる道を選んだ。「いくら知識があっても現場で生かせなければ意味がないと、身にしみています。どうすれば牛の状態と搾乳のバランスをよくすることが出来るか、難しいけれど奥が深い。やはり現場の経験を重ねていかないと、一人前にはなれま

せんね」

居間には、様々な畜産共進会での賞状やトロフィーが所狭しと並ぶ。久保田さんにとって酪農とは？の問いに、「弘さんから意外な答えが返ってきた。

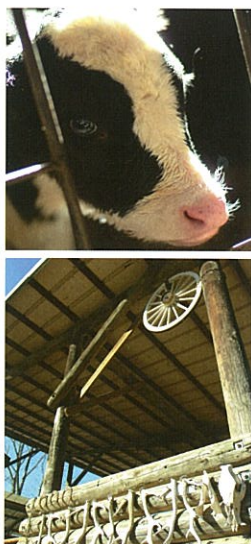
「牛たちは、いわば社員のような存在です。現在は世界中から優秀な乳牛の「種」がアンブルで冷凍取引される時代。種付けからはじめて、

どれだけ状態のいい牛を育て、生産性を高めることが出来るか、試行錯誤はありますが楽しみもあります。相手は命ある生き物ですから、過労させてもいけません。そう、酪農は会社経営そのものなんですよ」

久保田さんの飼育する牛には、人間の名字にあたる登録名が冠されている。「アイリスヒル」。もちろん、菖蒲ヶ沢の地名からとったものだ。

牛たちはいわば社員のような存在。優秀な社員をいかに育てることが出来るか、酪農は会社経営そのものなんです。

久保田 一弘・隆弘さん（菖蒲ヶ沢）



原 豊さん（林原）

自分で作ったりんごを、食べる方に直接届けたい。オリジナルパンフを作ったのも、HPを公開したのもその思いがあればこそ。

林原の自宅周辺を中心に、2・4ヘクタールのリンゴ畑を栽培する原さん。うち1ヘクタールが原さんの所有で、残りは高齢などで果樹栽培が難しくなった方の果樹園を借り受けている。今で、宅配便を利用する直送販売が多くなつたが、原さんは15年ほど前から、個人客を中心とした直接配送やりんご狩りを積極的に採り入れ、まさに行動する果樹農家として歩んできた。

「原農園のオリジナルパンフは、20年前から箱の中に入れていました。どこの誰が作ったのか、顔の見える農業にこだわったかったし、食べていただく方と繋がっていきたいという思いがありましたからね」手際よく剪定作業をこなしながら、原さんは振り返る。

平成17年、個人向けの宅配が約3000箱、企業向けが約1000箱、直接農園に訪れりんご狩りを楽しんだ分は約1000箱に及んだ。

「何年もリピートしてくださるお客様がいて、その口コミでお客様が知り合いの方がうちのりんごを注文してくださることが多いですね。このりんごはどんな所で作っているのだろうと、興味を持ってホームページにアクセスしてくれたり。直接売場以上、こちらも妥協はできません、ちよつとした味の変化にもお客様は敏感ですから」



ホームページの制作は、奥さんが担当。普段の作業は、奥さんとお母様の3人で行っている。農繁期にはご近所さんにお手伝いも依頼するが、力のいる剪定作業だけは、原さんひとりしかできない作業だ。4月いっぱいまでかけて、黙々と数千本の剪定にあたる。息子さんが頼もしい助っ人となる日も近い。

春日 俊文・健司さん（中芝）

花も野菜も、夢を作ることだと思っています。この花が誰に贈られるのかな、と考えたら楽しいじゃないですか。



「仲間と一緒にこのガラス温室を作ったのは、昭和53年。3棟のうち2棟はがバラ、1棟は年々作のキウリです。温室の他に水田も柿もあるから、年中忙しいよ。相手はまったくの生き物だからね」と俊文さん。2月半ばに苗を植え付ける春作キウリは、4月上旬から収穫が始まり、6月一杯まで朝晩2回の収穫が続く。8月に植え付ける秋作は、年末まで収穫ができる。春日さんの場合、野菜は俊文さん、バ

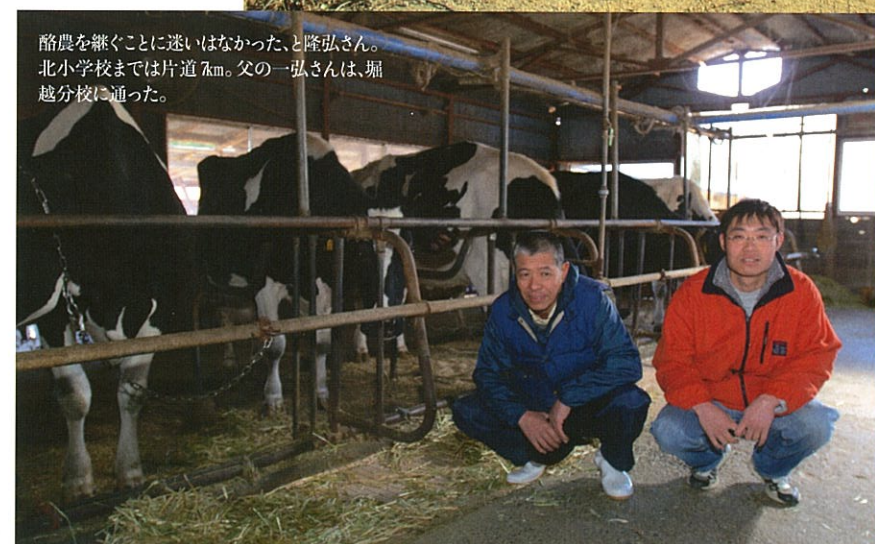
飯島のパラ農家へお世話になったんです。その頃から、自分はバラをやるうと決めていました。今は、8品種栽培しています。1棟で約4400株、年18万本位になりますね。目標は20万本！」そう明るく笑う健司さん。常に適正温度保たれた温室内では、厳冬の時期でも可憐なバラが花束の列のように咲いている。バラは花の中でも人気が高いだけに、色や品種のブームも起こりやすい。植え替えが容易でないと

め、常に消費者ニーズや市場の動向に気配りも必要だとい

「うちのバラは、90パーセントが東京へ出荷されています。あとの10パーセントが飯田です。花は、夢を一緒に作ることに、というのがポリシー。このバラは、誰に贈られるのかな、どこに飾られるのかなと考えていると楽しいし、夢があると思ふんです」



農事法人・河野温室組合のガラス温室は全部で8棟。バラに限らず、農業とは夢や健康を作ることでもあると、春日さん親子から改めて教えられた。



酪農を継ぐことに迷い、と隆弘さん。北小学校までは片道7km。父の一弘さんは、堀越分校に通った。



大地も、木も、水も、光も…。
生きていく上で必要な素材がすべてあることは、
贅沢で、豊かで、ありがたいことだと思っています。

豊丘村では、『だいち』が窓口となってインターンの受け入れを行ってきた。井上さんもそのひとり。

埼玉と神奈川県生まれの井上夫妻が、豊丘に暮らし始めたのはちょうど3年前。いつかは自然の中で、それも中途半端ではなく、自分たちにとって必要なものを自分で作る、自給自足の暮らしをしたいと考えていた。カヌーやラフティングを趣味とする、主人にとって、天竜川があり、里山の情緒が残る豊丘は、魅力を感じた場所。町から離れた場所であり、築80年以上で20年も空き家になっていた今の住まいを紹介された時、こころ思い描く暮らしが実現できる！と直感したそうだ。

「お金をかければ、都会だって土地を借りて農業だってできるんですよ。でもそれは、違うなあと感じていました。ここは、ある意味不自由な場所なのかもしれません。でも目をこらせば、周りにすべての答えがある。大地も、木も、水も、光も。生きていく上で必要な素材のすべてが揃っているんです。それは、とても贅沢で、豊かでありたい。子どもたちは、身近な素材を使って、のびのび遊んでいます」

井上さん宅は、農家民宿『なかや』としての姿もある。『なかや』とは、この家の屋号。お客様と、一緒に畑に向いて食材を収穫したり、お風呂のための薪割りやかまど用の薪を集めてもらうこともあるという。「お客様と



いうより、友人という感覚で一緒にテーブルを囲みます。季節に合わせたイベントを企画するのも楽しい。お月見、山菜採り、くだもの狩り、虫の観察…夕方になったら楽器を手に歌ったり…そこには、純真な子どもたちの笑顔と限りなく自由な暮らしがあった。

家族をベースに、生活を楽しむ心豊かな暮らし。
気づいたら、そんな理想のスタイルに近づいていました。

原地区の公民館委員として、豊丘にたくさんさんの繋がりができたと話す。「気づいたら、思い描いていた理想のスタイルに近づいていました。家族をベースにこれからの毎日を楽しくみながら心豊かに過ごしていけたらと思っています」

「大きな転機は、子どもができたことですね。当時、お互い仕事も充実していましたから、そのままDINKSでもいいと思っていました。でも、子育てする環境や、これからの人生の過ごし方、自分たちのライフスタイルについて、ふと立ち止まって考えたんです」

暖炉の炎が揺めくリビングで、小林さん夫妻が振りかえる。その頃暮らし始めていた場所は外資系企業が多く、隣人はフランス人家族。人生を愉しみなから暮らしやすさスタイルに、少なからず影響を受けていたという。「いろいろなきっかけが重なって、インターンを選んだのだと思います。飯伊地域は私たちの実家がある栃木と京都のちょうど真ん中あたり。旧セミナーハウス付近から見た景色に圧倒されたことを今も覚えています。この土地が偶然見つかった、あの時と同じ景色を今は毎日眺めて過ごしています。家族や友人とデッキで食事すること多いんですよ」



13歳のお姉ちゃんを筆頭に仲の良い4姉妹。

豊かなる丘に暮らす。

豊丘に暮らし始めて10年余。
地元の風習になじみつつ、決して無理はしないで、自分たちのペースで暮らししてきました。

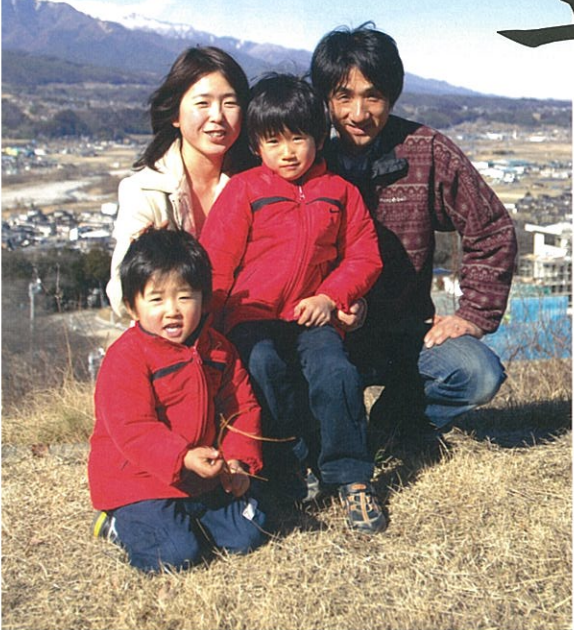
小林さん宅のある辺りは、もともと『そらくぼ』と呼ばれていた場所。南駒ヶ岳と伊那谷を臨む絶景と、ログハウスをゆったり流れる時間に癒しを求めて、飯田のみならず中京や東京からお客さんが訪れる。生粋の関西人、陶芸とガラス工芸家である、夫妻が、まだ小さかった息子さんと共に豊丘に移り住んで10年以上が経った。「都会に暮らし始める頃は、季節を感じることにほとんどなかつたんです。でもここへ来てから、寒いときは寒いし、暑い日は暑い。暑い日でも夕方には涼しい風が吹いて二日が終わる…というようにメリハリのある季節と二日を感じながら過ごせるようになった。そういった春夏秋冬の中に、地元のお祭りと風習にのつった行事もあつてね。豊丘の方にとってはあたりまえのことでも、自分たちにとっては二つとつが最初は驚きでした」と小林さん。ここが、ホッとする場所になったから…とギャラリー&レストランを始めたのは7年前。家の裏斜面には、春になると露が自生し、露園として開放している。人によって違うとは思いますが、どこに置かれても「地元の風習や意識には、できる範囲で協力していきたい」と思っています。でも根つからの地元人にはなれつこないのだから、決して無理はしません。自分たちのペースで暮らしながら、だんだんなじんでいくといいと思っています。ここは、本当に得難い場所なんですから」



ゼロからの専業農家でしたが、大きな不安や気負いはありません。
ゆっくり軌道にのせていければいいと思っています。

ゼロからの専業農家、見知らぬ土地へのインターン。安定していたサラリーマン生活からの転身は、よほど強い決意あつたことだろうと質問してみると、中原さんは驚くほど自然体だった。「もちろん生半可な気持ちではありませんが、何が何でも成功しなければ！というような気負いはないんです。できるところまでやってみよう。徐々に軌道にのせていければいいと思っています」

中原さんは現在、休耕田に全部で9棟のハウスを所有し、トマトを栽培する専業農家。昨年は2400株の『桃太郎』を栽培した。中原さん転身の原点は、会社の研究部門で、トマト栽培



味が濃いと評判の中原さんのトマト。自宅でももう、今年植え付ける苗の準備がはじまっていた。

**農家民宿は交流と体験がすべて。
「このお米おいしい!」
「はざかけのコシヒカリだぞ」
何げない会話がうれしいんです。**

【我が家においで下さる皆さんへ ファームステイのお手紙ありがとうございます。皆さんを受け入れます。筒井芳夫と妻のカツ美です。我が家の農業は、米作り(70アール)が中心で、カリン(10アール)ギンナン(10アール)その他自家用野菜や大豆、そばなども作っています。予定している農業体験は、「トラクターの試乗」や「畑の管理作業」などです。その他どうよう捕りや村内の視察、夜の探索など予定しています。夏の太陽の下、日に焼けるかもしれません。豊丘の自然と生活をどうぞ満喫して行って下さい。】

筒井芳夫さんは、勤労体験学習に先がけ受け入れ予定の学生に、自宅と自分たちの写真を添えて、こんな手紙を書いている。「どんな所に行くのかな、と不安なのは子どもも親御さんも同じ。こんな家なんだと期待してもらえれば、楽しみが増えるでしょう。学生さんだけでなく、援農ボランティアの方や定年退職して各地の農家民宿を泊まり歩いている人など色々な人が来るね」

昨年だけで農家民宿「ついで」には、120人ほどが訪れた。6人家族だった大きな家も、今は奥さんとふたりだけ。家族同居型の農家民宿は、食事と一緒に居間でいただく。思い出話や共通の話題で夜更けまで盛り上がることもしばしばだという。

「田植えの時期に来る学生たちには、裸足で田んぼに入って田植えを手伝ってもらいます。大騒ぎしながら、田んぼの感触を楽しんでいきますよ。」



受け入れ学生を連れて、村内の眺望のいい場所や、肉牛やイノシシ牧場、きのこの生産者や果樹園などを案内して回っている。将来大切な消費者になりうるのだから、農家民宿といえども常に工夫は必要…と長く村政に関わった筒井さんらしい視点ものぞく。

息子さんが3歳になるまで東京暮らしをされていた森田さん。子育てに大変な環境を、と主人の実家へ帰郷。「私の出身は山梨なんです。豊丘が大好きで、ここから、そ、かけがえない豊丘の魅力が見えるんだと思います」



**手作りのいろいろを囲む癒しのひととき。
体験することではしか得られない感動を、
大切にしたいと思っています。**

さあどうぞ、と森田さんが迎えてくれたのは、趣のある民藝調のいろいろ部屋。聞けば、ご主人が少しずつ手作りしていった部屋なのだとか。「昨年からは農家民宿としての受け入れを始めた。火をおこすところからはじまって、野菜を採りに行って、料理を一緒に作って、薪でお風呂を沸かし、と我が家はすべてが体験型。都会のマシヨン暮らしの子どもたちは、畑はもちろん庭のない子がほとんどだから、土に触れることが新鮮なようです」

昨年受け入れた中学生の中に、野菜嫌いな子がいたという。植え付けを手伝ってもらい、旬の野菜を一緒に収穫した。アスパラガスって、こんな風に生えるんだーと驚き、土に蒔いたり植えたりして

はじめて野菜ができることを体験した彼女は、夕食で嫌いな野菜を口にした。「甘ーい!」が第声。いろいろの炭の上に網を置いて焼いただけだったから、新鮮な野菜そのものの味がしたはず。そういえば、一緒にニラを採って、餃子を皮から作ったこともありましたね。今、大人だけでなく子どもも疲れているんだと思います。おいしいものを食べてゆつくりして、元気になるのもうれしいですね。いろいろの炎を見てみると、それだけで落ち着いてくるんですよ」

これからは、自分のやりたかったことをして生きていきたい、と語る森田さん。安心で安全な有機野菜と手間をかけて作る料理。これからこの場所、多くの現代人たちが癒されていくに違いない。

民宿 ついで



未来への種。

三石 茂昭さん(城)
目に見える農業こそが大切だと思っています。
来たとき「だんまり」だった子ほど、帰りには
心を開いておしゃべりになる…不思議だね。

年間を通して農業体験のスケジュールを展開する『農家民宿 三石』は、農業体験の豊富さ、もさることながら、ご夫妻とおばあちゃんのとびきの笑顔と、ありのままの温かなもてなしが魅力のひとつだそう。平成15年に、筒井芳夫さんと共に豊丘初の農家民宿として開業して3年目。吉原第三中の勤労体験学習は、開始当初の21年前から受け入れを続けている。「目に見える農業を体験してもらおうと思つて続けています。都会でなくても、最近はスーパーで売っている果物や野菜しか目にしない人もいます。安全・安心なんて言われていられるけど、どこがどう安全で安心か見えにくい。消費者に作ったり手伝ってもらって、体験してもらうことが大切なんじゃないかと思っています」

料理は居間で一緒に話しながら、が基本。食卓には、鯉のうま煮や煮物、秋なら松茸など旬の地の素材を使った家庭料理が並ぶ。夏場は、ガレージで豪快にバーベキュー。親戚に來たみたい…そんな言葉が何よりと語る。

「勤労体験で訪れた子どもの中



には、学校で問題があったと連絡のあった子もいました。けれどもうちでは全く気にしない。同じように果樹園へ一緒に行つて、摘果を手伝ってもらい、村内を案内しました。最初は全く口を開かないほど無口だったのに、たった1日寝食を共にして手伝ってもらっただけで帰る頃には心を開いておしゃべりになるんです。不思議だね。たまに帰る時泣かれちゃってねえ…こちらも切ないよ」

長い人生のわずか数日でも、豊丘を訪れたこと、農業体験をしたことが、彼らの心の大切な糧となることを祈らずにいられない。



豊丘は、自分にとっていちばん居心地のいい場所でした。一人でも多くの人に、ウォーキングやスポーツの楽しさを伝え、健康の種を蒔いていけたらいいと思っています。

日本新記録の樹立、ソウルオリンピック出場：『JAPAN』を背負ったアスリートの顔と、命を預かる広域消防職員の顔。酒井さんは当時、葛藤を続けていたと語る。「あの頃、競争の強化選手は自分ひとり。期待も大きく、オリンピック前後は1年のうち半分近く仕事をあけて遠征や大会に出場していました。職場も地元も温かく応援してくれていましたが、このまま続けたいのだからかという想いと、やれるだけやってみようという気持ちが強くなり、退職を選びました。後ろ髪をひかれる想いでしたね」

1990年大学に進学、あえて逆戻りできない状況に自分を追い込んだことが功を奏したのか、この年は日本記録の更新やアジア大会での銀メダルなど記録ラッシュとなった。

大学卒業後、3年間母校で競技者兼コーチとして競争の指導研究にあたったのち、帰郷。「豊丘は、両親や応援してくれる人がたくさんいましたし、自分にとって居心地のいい場所なんです。選手を強くすることも大切ですが、自分が取り組んできたウォーキングや健康運動指導士の資格を生かして、多くの人を健康にするということにやりがいを感じています」



幼い頃とあまり風景が変わっていないところが多いのは、豊丘の魅力。ただ新しくしたり壊したりするのではなく“景観を残していくという開発”もあると思うんです。一度村を離れているからよけい強く感じるのかもしれませんが。

響かせて。夢

息子の良太さんも6年生まで少年野球クラブでキャッチャーとして活躍。親子3代、野球で繋がる絆だ。



原道弘・和弘・良太さん(北市場二)

子どもたちを指導していると、そのひたむきで一生懸命な姿にかつての自分の姿がだぶってきます。

実業団野球のピッチャーとして、都市対抗への出場経験を持つ原道弘さんは、豊丘少年野球クラブ創立当時の指導員のひとり。当時村民グラウンドがありませんでしたので、天竜河原の竜建ホミのグラウンドをお借りしていました。発足当時は指導員7名ほどで、子ども達は各学年に20名ぐらいたいたと思います」

和弘さんは、少年野球クラブを経て中・高大学と野球を続け、現在、豊丘少年野球クラブで指導員を務めている。「野球は、単に技術だけでなく礼儀や勝負の難しさや悔しさ、人間関係を知る生きた教科書なんです。負けていたとしても、

9回まであるんです。しくじっても必ず挽回するチャンスが来る。野球から教えられることは、本当に多いし、野球を離れても心の軸になつてくれるはず」

少年野球クラブは、小学校4年生から6年生まで学年ごとにチーム編成されている。4年生の時には、10メートルほどしか投げられなかった子が、5年生では倍になり、6年生ではさらに体力も目に見えて付いてくる。ひたむきに練習に打ち込む姿に、かつての自分の姿がだぶることもあると語る。「かつて一緒に少年野球をやっていた人が、父兄としてまた野球に戻ってきています」

このゆびとまれ 子どもとの関わりの中で、新しい村の魅力を発見することもあります。親も子も気軽に遊び、集まれる場でありたいですね。

『このゆびとまれ』は、未就園児のための子育てサークル。平成14年に名ほどで立ち上げ、現在のメンバーは30名ほどに増えた。毎月1回、保健センターをベースに、お花見、飯田消防署見学、さつまいもの苗の植え付け、水遊び、村内めぐり、クリスマス会、お母さんのためのチューブ体操、読み聞かせ、エプロンシアター、親子クッキング等々、季節にあわせた多彩な活動を続けている。

「メンバーは、自分も含め豊丘出身の方ばかりではありません。子どもと一緒に村内のいろいろな場所に出かけたりすることで、村内外の魅力をを知ることが多いんです。子どもたちが楽しく遊んでいるのを見守りながら、お母さんたちは育児の悩みを話し合ったり、情報交換をしています」と代表の中原美穂子さん。平成17年度には、ニッセイ財団が主催する『広がり、元気な運動』の助成対象団体に豊丘太鼓の会と共に選ばれ、念願の大型遊具や楽器を購入することもできた。

「子育て中のお母さんたちは、悩みを抱え込みやすいで気軽に何でも話し合える場が必要だと思います。悩んでいるのは自分だけ」と感じていることも、実はみんな経験していたり乗り越えてきたりしているもの。これからは、周辺の市町村のサークルと交流するなど、子どももお母さんも集まるのを楽しくしてくれようという企画を考えていきたいですね」



楯利彦さん(下市場)

指導員は、親や教師でも、友達でもなく、何でも知っていて、時には叱ったり褒めてくれるいい意味での『ガキ大将』のような存在かもしれません。

「豊丘少年野球クラブは、スポーツ少年団のようには予算があつて...という組織ではなくボランティア団体なんです。クラブのOBや私のような野

球経験のある父兄が指導員を務めています。はじめのうちは、子どもたちどう接すればいいのかわかりませんでした。やっというにつれて、子どもたちの望む存在になるのが一番いいのではと思うようになりました。

親や教師のような立場ではなく、友達ほど近づきすぎず、自分たちより何でも知っていて、時には叱ったり褒めたりしてくれる...『ガキ大将』のような存在ではないか、と思うようになり、以来そのスタイルで接しています」



楯利彦さんは、平成17年度6年生を指導した。5年生のはじめまでは負けてもケロリとしていた子どもたちが、6年生になると努力することの尊さや負けることの悔しさを知り、ポロポロ涙を流すようになる。「野球というスポーツほど、自己犠牲を強いられるスポーツはないのではないだろうか。打ちたい場面でも、バントサインが出たら犠牲になるわけですから勝つためには、自分勝手なプレーは許されない。野球をとおして子どもたちには感謝や助け合う心、耐えることを感じてほしいと思っています」



天恵製菓株式会社(小園)

思えば、マイナスからの再スタートでした。菓子をを通して、これからも「夢」と「愛」を与えることができる企業でありたいですね。

「ゼロからのスタート」という言葉がある。天恵製菓の場合は、ゼロというよりマイナスからの再出発だった、と片桐裕社長は振り返る。「村内には知っていらっしゃる方も多いのですが、天恵製菓の前身である田島屋製菓は、大正12年に創業しました。最初に作ったのは『はぜおこし』でした。当時はまだ養蚕景気に沸いていた頃。戦後の復興

期にかけて、生菓子から日持ちのきく半生菓子の製造へと転向し、本格的に全国流通に乗りだしました。村の合併は、ちょうどそんな時期に重なります」

昭和34年に菓子製造業では飯伊初の子会社として改組し、工場を構えて従業員も増えた。が、全国的に激しかった労働組合運動の波にさらされ、昭和36年には倒産に追い込まれてしまう。しかし、気の遠くなる負債を抱えてもなお、菓子製造の発展を目指した夢が消

えることはなかった。現在の天恵製菓株式会社が設立されたのは、それから5年を経た昭和41年。この年に、今日まで定番商品となっている『天恵どら焼き』も生まれている。

「苦い経験から、天恵は一人あたりの生産性を重視して機械化でいこう、という思いがありました。お菓子は、年齢を問わず楽しむ、生活に潤いを与える存在です。だからこそ有害な添加物は使わず、自然の味や品質管理にこだわっています。会社は、個人のものではありません、天から授かったもの。大きくなればなるほど、地域のものであり社会に貢献するべきという気持ちです」平成18年現在、アイテム数は200。3つの工場で、1日に100万から120万個が生産されている。

豊丘発の流通半生菓子は、国内だけでなく海を越えてアジア地域やアメリカでも受け入れられ、語らいの時を彩る。

躍動するふんわり。

長野酒井医療株式会社(八王子)

介助負担の軽減と入浴できる幸せ。両方の視点で、これからも快適なりハビリ環境を提供していきたいと思っています。

工場の中では、ちょうど納品前の入浴装置の検査が行われていた。「浴槽の脇に立つてみてください。これは、横になったまま安全に入浴できる介護エイドバスですが、腰をかめなくても介助ができるんです」と山本都史雄社長。

長野酒井医療株式会社は、東京都に本社を置くリハビリテーション機器の総合メーカー・酒井医療株式会社の関連企業として、平成2年に設立。福祉施設や病院における特殊入浴装置を中心に製造を行っている。豊丘で製造されているのは、全体の約80%が入浴関連装置。酒井医療が、入浴装置におけるリーディングカンパニーであることを考えると、日本の福祉施設や病院で使われている入浴装置の多くが、こゝ豊丘で製造されてきたことになる。

「日本人にとって、入浴は心と密接に結びついた習慣で、特に高齢者にとってはこの上ない幸せや楽しみだったりします。一方でスタッフはなるべく介助負担を減らし、きめ細かなケアに心を配りたいと願っています。その両方の視点で、より安全で快適なりハビリテーション環境を提供するのが私たちの役目なんです」長野酒井医療で製造される入浴装置の数は、年間およそ250台。豊丘発のリハビリテーション機器が、今日も福祉の現場で多くの人を癒し、支えている。



豊丘に会社を構えたのは、本社の社長が、飯田へ疎開経験があり、飯田高校卒業であった縁から。工場内の別の場所では、なだらかな曲線を描くステンレス浴槽が手作業で製作されていた。



株式会社タカモリ(柿外土)

技術や精度の高い「匠」の力は、地域の大切な資源なんです。海外に進出して改めて、国際競争を棲み分けるキーワードが見えました。

「取引会社の相次ぐ海外進出に伴い、当社でもインドネシアと中国にプレス加工の工場を開設しました。確かに人件費は安いのですが、技術力が必要な製品は簡単に海外移転できないと実感しました。今、より高い精度を必要とする精密加工品は、日本に回帰してきています。緻密な「匠」の力は、地域の財産であり資源なんです」と、タカモリの筒井常雄社長。

タカモリで設計・製作されたプレス金型・プレス加工品は、先端のOA機器や電機製品、自動車の小型精密モーターなどに使用されている。昭和34年の会社設立当初は、まだ「次男坊対策」なる言葉が叫ばれていた時代。しかし今や少子化が進み、産業の構造そのものが変わった。「今後、タカモリの本社は、より専門性の高い技術センター的な位置づけになっていくと思います。量産できるものは海外でできますが、開発分野やより高い高度な技術が必要とされる製造品は「匠」の力が必要です。しかしながら、匠型の人材は短期間では育ちません。これからどうやって技術の継承をしていくかが大きな課題のひとつですね」

筒井社長が数年前に訪問したイタリアでは、企業の規模を問わず、優れた職人が尊敬され認められる風土があった。若い人材がその技術を継承しようとし、地域がその仕組みを支えている現状も目の当たりにしたという。「製造業の分野に於いては、豊丘のみならず飯田下伊那地域が優れた技術の集積地であることは明らか。量から質へ視点を切り替え、より高度な付加価値の高い『飯田ブランド』の確立は、決して夢ではないはずです」



送迎バスも、少量パックも 地域に密着した店舗ならではの心遣い。 お惣菜は、手間がかかっても 手作りの家庭の味にこだわります。

店名の「パルム」とは、「6人の仲間」の意。個人商店を営む6人が集まって、平成3年にオープンしてから早くも15年の時が過ぎた。

パルムでは、定休日の水曜を除く週に5日、毎日1コース、村内の各地域に無料の送迎バスを運行している。会所や神社、バス停を目印に停車し、午前10時30分頃、パルムに到着。買い物後は、再び家の近所まで送っていく。「毎週車の中で話をするのを楽しみにしてくれている方もたくさんいらっしゃいます。この送迎バスを利用されるのは、普段なかなか買い物に出てくることができない高齢者が多いんです。帰りは荷物が重くなるので、自宅まで車を回すこともあります。地元根ざした店だからこそフットワークや気遣いは、パルムらしさでもありますね」理事長の畠山さんは、お客さんの切実な声に気づかされることが多いと語る。

ある時、惣菜コーナーでお客さんがさばの煮物を手に「これ半分にしてくれませんか？うちでは4切れあっても食べられません」と願った。「もちろんわかりやすい目玉商品は必要です。お得な商品をたくさん買いたいというニーズの一方で、必要なものを必要な量だけほしいというニーズだってある。安く仕入れることができたから、まとめ売りしよう！と考えてしまいがちですが、それは売側の論理の押しつけでもあるということに気づきました」以来、野菜や肉のコーナーでも、ばら売りや少量パックを置くようにしている。

オープンから今日までに、近隣には大型店舗の出店が相次いだ。「地域に根ざした店として、ただにお客さんの声をお店に反映していけるかが、生き残っていくための条件でしょうね。パルムのお惣菜は、手作りの家庭の味を大切にしています。手間はかかりますが、これからもこだわります」

心ふれあい、しあわせ実感 うるおいの郷を目指して

昭和30年4月1日、河野村・神稲村が合併し現在の豊丘村が発足してから50年の節目となりました。この間、昭和36年、58年の豪雨災害などの大きな自然災害や、政治経済の移り変わり等大きな試練を乗り越えて参りました。これも村民各位の皆様のご賢明とご協力の賜物と心から敬意と感謝を申し上げます。平成の合併問題につきましては、研究と議論を重ねてきましたが、当面合併の条件を整えるまでに進展することなく、現状の中で村づくりを進めることになりました。

第4次豊丘村総合振興計画も平成15年度から進めておりますが、「心ふれあい、しあわせ実感 うるおいの郷」を目指して、恵まれた自然の中で、人情味豊かな村民性を宝とし、活気に満ちた清潔で住み良い村づくりを目指して参ります。本冊子が、豊丘村の顔として内外への発信となり交流・発展の糧となることを念じ、発刊にあたってのご挨拶いたします。

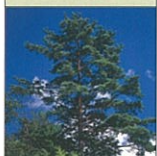
平成18年3月

豊丘村長 吉川達郎

●この要覧の制作にあたり、多くの村民の方々にご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます●

STAFF
Planning & Copywrite: Kumiko Sasaki
Art Direction & Design: Yoshio Matsumoto
Photograph: Masayoshi Kitazawa





道
程
標
みちしるべ

Mile Stone

豊丘村●2006年・合併50周年記念 村勢要覧

発行日：平成18年3月

発 行：長野県下伊那郡豊丘村

編 集：豊丘村役場総務課

制 作：What's／デザインスタジオ・ピラミッド